



# 日本ブロンテ協会



## 2018年大会プログラム

日時 2018年10月13日(土) 9時50分から17時30分まで  
 場所 中京学院大学 1号館 112室  
 〒509-9195 岐阜県中津川市千旦林1-104 TEL0573-66-3121  
 アクセス:JR名古屋駅より中央本線でJR中津川駅へ。快速で約70分。特急「しなの」  
 で約50分。JR中津川駅より車で約15分。北恵那バスにてJR中津川  
 駅より約15分。

★受付 9:20～

総合司会 上智大学准教授 小川 公代

★開会の辞 9:50 日本ブロンテ協会理事 前田 淑江

★研究発表 10:00～12:00 司会 滋賀大学名誉教授 岩上はる子

1. 「客間から抜け出す女性たち:『シャーリー』と『ジェイン・エア』における屋内空間」  
法政大学非常勤講師 石井麻璃絵

2. 「『シャーリー』と『メアリー・バートン』における語りの比較」  
鈴鹿工業高等専門学校助教 古野 百合

司会 松蔭大学教授 阿部 美恵

3. 「19世紀小説における<老い>の表現:シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』  
を中心に」 山梨県立大学助教 畑 中 杏美

4. “Romance and Reality : Horses in *Wuthering Heights*” 東洋大学准教授 江口 智子

★会場校挨拶 13:00～13:10 中京学院大学経営学部長 須 栗 大

★総会 13:10～13:40 司会 関西外国語大学教授 渡 千鶴子

★奨励賞表彰 講評 日本ブロンテ協会奨励賞審査委員長  
青山学院大学名誉教授 橋本 清一

★会長挨拶 横浜市立大学名誉教授 白井 義昭

★大会委員長挨拶 中京学院大学教授 松原 典子

★講演 14:00～15:00 司会 神戸海星女子学院大学教授 惣谷美智子  
演題 「『嵐が丘』に於ける愛の絆」 青山学院大学名誉教授 橋本 清一

★シンポジウム 15:10～17:20 「エミリー・ブロンテの『嵐が丘』を読み直す」  
司会・発題者 愛知淑徳大学名誉教授 久野 幸子  
発題者 京都大学大学院博士後期課程 井寺 利奈  
発題者 武庫川女子大学教授 玉井 暲

★閉会の辞 17:20 愛知淑徳大学名誉教授 柳 五郎

★懇親会 18:00～20:00 於 中津川市にぎわいプラザ 会費 5,000円  
司会 駒澤大学准教授 川崎 明子

## 研究発表

### 1. 「客間から抜け出す女性たち：『シャーリー』と『ジェイン・エア』における屋内空間」 法政大学非常勤講師 石井 麻璃絵

本発表はシャーロット・ブロンテの『シャーリー』、『ジェイン・エア』を題材に、女性の空間の問題 (anxieties about space) について考察するものである。近年の家庭性 (domesticity) の研究は、個々の部屋に付随する機能やインテリア、使用者の違いに注目し、「社会」と対峙した一つの大きな空間としての19世紀ミドルクラスの「家」を否定する。こうした研究は、家が階級やジェンダーの壁によって内部が分割された複合的な空間であったことを指摘すると同時に、しばしば文学や理論のなかで家庭の中心として描かれる女性の空間が実のところ限られたものであったことを示唆する。発表では当時の屋内空間がいかにジェンダー化されたかを階級意識の問題と合わせて考察し、社会が淑女に用意した空間 (客間) を理想の場所としないヒロインたちの姿から、作者が説く家庭内における女性の領域拡大と従来とは異なる「家」の必要性を読み取る。

### 2. 「『シャーリー』と『メアリー・バートン』における語りの比較」 鈴鹿工業高等専門学校助教 古野 百合

シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-1855) の『シャーリー』 (Shirley, 1849) と、エリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell, 1810-1865) の『メアリー・バートン』 (Mary Barton, 1848) は「社会問題小説」であり、それぞれラダイト運動、チャーティスト運動における労資問題をテーマとしている。2作品とも全知全能の語り手が存在し、物語に幾度となく介入するが、『メアリー・バートン』においては語り手が蜂起する労働者に対して批判的な見解を示しているのに対して、『シャーリー』の語り手は個人的見解を述べていない。前者は労働者の窮状に同情し、後者は客観的に語る。それぞれの作品における語り手の介入に耳を傾け、とりわけ労働者問題に対する異なる姿勢について検証してみたい。

### 3. 「19世紀小説における〈老い〉の表現： シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』を中心に」 山梨県立大学助教 畑中 杏美

シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』は、ジェインの18歳から19歳頃のことが物語の中心となっており、老いとは無縁の、非常に「若々しい」作品であるように思われる。作中で「老人」として登場するキャラクターも居るが、知覚能力の低下や、精神的・肉体的な衰弱という「老い」のイメージで描かれる彼らは、ジェインの若さと好対照をなす者として存在しているかのようである。一方、ジェインの夫となったロチェスターだけは、初老といえる年齢に達しようとしている最終章で、身体的な機能を回復させる。一見すると典型的でネガティブなイメージでしか老いを描いていないかに思える『ジェイン・エア』であるが、多様化しつつあったヴィクトリア朝の老いのイメージを見出すこともできるのではないだろうか。本発表では、同時代の他の出版物に描かれたイメージと比較しながら、『ジェイン・エア』において描かれる老いのイメージについて考えたい。

### 4. “Romance and Reality : Horses in *Wuthering Heights*” Tomoko Eguchi, Associate Professor of Toyo University

Animals and nature are conspicuous in *Wuthering Heights*. Many critics have analyzed animals as symbols in relation to characters in this novel. However, few critics have hitherto paid much attention to horses. Graeme Tytler states that the horse is “an erotic symbol” in terms of “tragic or futile love relationships” in this novel. This paper will partly concur with Tytler in that horses accompany some characters’ unhappy love romances. However, rather than regarding the horse as a certain symbol, it will examine roles of horses in *Wuthering Heights*, demonstrating how they enhance romantic elements despite realistic descriptions and the harsh situations surrounding the story.

After overviewing the horses’ existence around many characters, this study will focus on the relationships between the second Catherine (Cathy) and her pony, Minny. It will insist that the scene of Cathy’s secret ride across the moors in the moonlight winter evenings embodies Romanticism. On the other hand, it will reveal the social disparity, regarding circumstances of the groom Michael, and Emily Brontë’s treatment of horses as obedient and emotionless creatures. This paper will suggest

that regardless of Emily's strong attachment to animals, her descriptions of horses are conventional. Nevertheless, it will state that Emily's love of animals, keen observation, and rich imagination are intertwined in *Wuthering Heights*, making it an excellent blend of romance and reality.

## シンポジウム

### 『エミリー・ブロンテの『嵐が丘』を読み直す』

今年度のシンポジウムでは、『嵐が丘』を初心に戻って、読み直してみたい。発題者は、それぞれの読みを開示すると同時に、活発な議論のための問題提起を行いたいと考えている。これらをきっかけに発題者とフロア、あるいはフロア間同士で多くの読みが提示、検証され、作者がこの小説に込めたさまざまな、そして切なる願いが少しでも明らかになることを願っている。

### 『嵐が丘』における“heath”と“heathenism”

京都大学人間環境学研究所博士課程 井寺 利奈

『嵐が丘』に登場するギマトンの副牧師は、野生児のように過ごす幼少期のキャサリンが、すっかり異教徒 (heathenism) になってしまうのではないかと危惧する。「異教徒」を意味する“heathenism”の語源は「荒野に住む者」である。一日中ヒースクリフと荒野を駆け回り、死後もなお荒野をさまようキャサリンは、「荒野に住む者」と言えるかもしれない。エミリー・ブロンテにとってヒースの生い茂る荒野は、想像力の源であると同時に、それなしでは生きていけないほど至要なものであった。それは夢の中で天国へ行くも、地上に戻りたいと泣き、荒野の真ん中 (the middle of the heath) へ帰って歓喜する『嵐が丘』のキャサリンにとっても同様である。本発表では、今一度『嵐が丘』の“heath”に焦点を当て、エミリーとキャサリンにとって欠くべからざるヒースが、作品内で持つ意味について再考したい。

### 『嵐が丘』における復讐と赦し

愛知淑徳大学名誉教授 久野 幸子

『嵐が丘』はこれまで「現世で結婚できなかった男女が霊界で魂の合一を達成するという神秘主義的なテーマを扱った小説である」と言われることが多かったが、エミリー・ブロンテが最終的に目指していたのは、そのようなものではなかったと思う。確かに、この小説に描き出された自然は「冬はうら悲しく、夏は天国のよう」(32章)である。しかしながら、エミリーにとっては神と人との関係が最も重要であり、小説全体として、エミリーは、無意識的に神への信仰に生きることを願っていたキャサリン・アーンショー、そのキャサリンを愛し、生前も死後も彼女をひたすら求め続けた主人公ヒースクリフが、どのような過程を経て、真の信仰に目覚めたいと感じ、あるいは目覚めようとしたのか、その18年に及ぶ精神的変遷を子供たち世代との葛藤も含め、丹念に辿ろうとした作品であると思う。

### J・ヒリス・ミラーの『嵐が丘』論再考

武庫川女子大学教授 玉井 暲

『嵐が丘』がリアリズム小説であることに異論を唱える者はまずいないだろう。というのは、この小説の魅了的な特徴としてリアリスティックな細部描写が指摘できるからである。たとえば、嵐が丘の館の奥の部屋の壁板の上にキャサリンやヒースクリフなどの名前が落書きされた場面の描写、大雪で道標の消えた田舎道の描写、3人の墓石の様子やあたりの風景を捉えた描写などは、実際の場所や空間のありようを鮮明にとらえたりリアリスティックな描写であることはいままでもない。ところが、このリアリスティックな描写は、ただ単にその場面の表層をありのままに描いたものにとどまらず、それ以上の意味があることを訴えてくる。J. Hillis Miller が注目するのは、このような描写の言葉の「質」なのである。要するに、これらの描写は、*emblematic, figurative, symbolic* になっていて、『嵐が丘』の読者は、リアリスティックであるとともにエンブレマティックでもある描写に誘われて、存在するかもしれない、真の、大きな、あるいは秘密の意味を求める追跡の読みに引き込まれるという。といて、この営みの果てには、そうした究極の意味を把握できるという保証はないという。

J・ヒリス・ミラーは、*Fiction and Repetition* (1982) 所収の「『嵐が丘』論」において、「最良の読み」を実践してみせた。ミラーによれば、「最良の読みとは、テキストの異種混交性 (heterogeneity) をもつとも見事に説明した読みであろう」(p. 51) という。ミラーの読みを再検討してみたい。

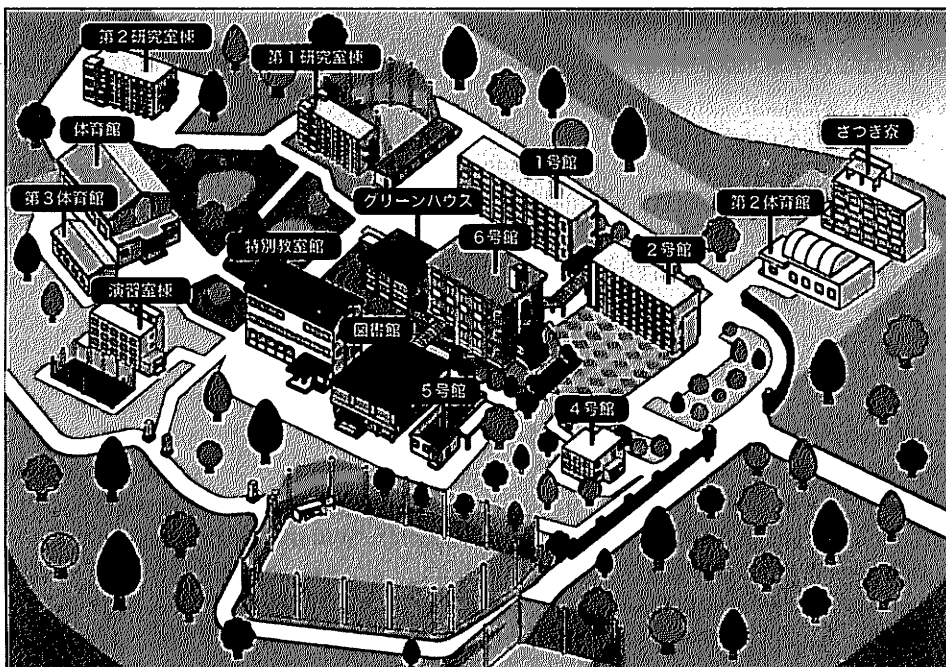
# 中京学院大学

## 【アクセス】



JR名古屋駅より中央本線でJR中津川駅へ。快速で約70分。特急「しなの」で約50分。JR中津川駅より車で約15分。北恵那バスにてJR中津川駅より約15分（土曜日はバスの本数が少ないので、ご注意ください）。中津川駅からタクシー利用の場合、約15分、料金は2,000円程度です。

## 【キャンパスマップ】



マップの右下にあるのが大学の正門、大会会場は1号館112室です。

## 日本ブロンテ協会事務局

〒577-8502 東大阪市小若江 3-4-1

近畿大学理工学部 菟原美和研究室

TEL 06-6721-2332 (代表) 06-4307-3570 (直通)

e-mail brontesocietyjapan@gmail.com